

これまでのいきさつ  
レキシントン町エスタブルック小学校  
で実際に起こった一連の事件について、四回にわたり紹介してきた。「同性の両親がいる家族」を紹介する本と、同テーマを扱った授業中のディスカッションについて、幼稚園児の父親ディヴィッド・パーカーが抗議し、学校からの立ち去りを拒否したため不法侵入罪で逮捕された。その後、同校二年生の担任が、二人の王子が結婚する絵本「King and Knight」を授業中に読んだ件で、パーカーは逆に町や公立学校を訴え、これらの事件は人気テレビ番組やインターネットで論争的になった。前号では、これらの事件をきっかけに、公立高校での対立、白人優越主義者団体/ハイトグループのデモ、マスコミからの取材攻撃、といった数多くのドミノ効果が起こったことを紹介した。

もし日本で同じような事件が起こったとしたら、学校や町はどんな対応をするだろうか？  
典型的な学校の対応は情報を公開せずに沈黙を守ることである。そしてマスコミの圧力に耐えられなくなった時点で校長が「私は何も知らなかった」と教師の個人的なミスをおわせたうえで、「校長としての私の監督が行き届かなかった」と判で押したような謝罪をするのではないだろうか。保護者はマスコミと一緒に攻撃することはあっても、学校や教師を守るために戦おうとはしない。スケープゴートにされ孤立した関係者が苦悩のあまり自殺することも少なくない。

しかし、レキシントン町の人々の対応はまったく異なるものだった。レキシントン公立学校の責任者と教育委員たちは、どれほど右よりのマスコミから叩かれ、何千ものヘイトメールを受け取っても、「エスタブルック小学校と教師の言動は、レ

バトルグリーン/連載エッセイ10

渡辺 由佳里

レキシントン町のユニークな対応<その1>

キシントン公立学校の基本的価値観に即したものである」と毅然とした態度を貫いた。  
そして保護者の一部は傍観者に徹さず、「私たちの公立学校を守ろう」と立ち上がった。  
最初のアクションは、「生徒にとつて心身共に安全な環境を守る」ことを短期目標に掲げた「Lexington CARES」という町民グループの結成である。広報やマーケティングを専門にする者が中心になり、「状況を把握していないレキシントンの住民たちをゆがんだマスメディアの情報から守る対策」が立てられた。ここで強調されたのは、宗教保守派からの感情的な攻撃に対して「怒り」や「憎しみ」で応対するのではなく、「レキシントン町の基本的価値観のポジティブなメッセージ」に徹することである。

プロフィール

わたなべ ゆかり・1960年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。2001年、『ノーティーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。2003年、二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。  
<著者のブログ>  
<http://watanabayukari.weblogs.jp/>

町のレベルでも、「Emergency Response Committee (緊急事態対応委員会)」が速やかに招集された。この委員会は、以前に紹介した「No Place For Hate (以降NPFHと省略)運営委員会」の委員長、警察、その他の公共機関の代表者などで構成されており、町で緊急性の高い事件が発生すると二十四時間以内が集まって対応策を取るようになっていた。

今回の緊急事態対応委員会のリーダーになったのは、NPFH運営委員長のジル・スマイロウと「Respecting Differences (相違を尊重する会)」の代表者メグ・ソーエンズである。実はこのソーエンズは、パーカーとその支持者たちがターゲットにしているエスタブルック小学校の「レスピアン」の保護者なのである。日本だけでなく合衆国でも、憎しみのターゲットになった人物は他人の目を恐れて身を隠すものだが、ソーエンズは町の基本的価値観を信頼し、町や学校と一緒に真っ向から偏見と闘うことを選んだの

だ。彼女の勇気もさるものだが、彼女に对应委員会のリーダーの役割を与えた町のほうも、基本的価値観と一致した行動を取ったことを褒められるべきだろう。

私が予想していたのは、関係者がステージに立つて質疑応答を交わすタイプの会議である。ところが、この緊急対策会議はのっけから私を驚かせた。  
五十人が大きな円陣を作り、まず一人ずつ時計回りに自己紹介をするのである。しかも、互いの呼び名は役職にかかわらずファーストネームというルールだ。

※ 下記の「エスタブルック事件参考サイト・文献」、『たからまがじん』2007年10～12月号、2008年1月号をご参照ください。  
※ 文中の固有名詞は新聞などですでに公表されており、ここでも実名を用いています。

**エスタブルック事件参考サイト**

【Lexington C.A.R.E.S.、レキシントン公立学校教育長、レキシントン検察長による共同声明】  
<http://www.lexingtoncares.org/LPSPressRelease2005-05-02.pdf>

【Lexington C.A.R.E.S. による記事】  
HYPERLINK "http://www.lexingtoncares.org/LearnTheFacts.html"  
<http://www.lexingtoncares.org/LearnTheFacts.html>

【Article 8 Alliance による記事】  
HYPERLINK "http://www.article8.org/docs/news\_events/parker/main.htm"  
[http://www.article8.org/docs/news\\_events/parker/main.htm](http://www.article8.org/docs/news_events/parker/main.htm)

**参考文献**

Time: "Feels Like Teen Spirit", August 8, 2005.

少し遅れてやってきた私を隣の席に招いてくれたのは、グレイのスーツが似合う穏和な雰囲気男性でダンキンドーナツのコーヒースタッフをすっていた。

隣的人物が警察署長のクリストファー・ケイシーだと知って私はちよつと身構えたが、若い頃社会活動家だったらしき行政委員の一人が「警察官とファーストネームで呼び合う仲になるとは、あの頃の僕には想像もできなかったなあ」とジョークを言う。ケイシーも一緒に笑って笑いだし、ゲイであることを公表している牧師が「私もです」と同意すると、笑いの輪はさらに広がった。自己紹介のおかげで話しやすい雰囲気ができあがり、それを受けてレキシントン警察は「我々は、情報を受けて町民に速やかに公開するのをもっとも有効な対応策だと信じています」と単刀直入に現状を説明し始めた。(つづく)